

『おらが春』第一話の設定をめぐる

黄 色 瑞 華

『父の終焉日記』の成稿時期は、その本文で継子意識がむき出しにされていることから、父の遺産問題が紛糾しはじめた文化四年七月（父没後最初の帰郷）以降、翌五年十一月「取極一札之事」成立までの間と推定され、『寛政三年紀行』の成稿は、原本の書体、成美のものとは推定されている朱筆の跡、『父の終焉日記』の本文との関連、さらに文化三年の『昔話稲妻表紙』に想を得たかと思われる箇所も指摘されて、『父の終焉日記』成稿の後、文化五年六月（『急通紀』文化五年の、双樹に貸した書物の控えに、「一、寛政三記行 柏原迄 一冊」とある）の間とみるのが今のところ妥当と思われる。

『父の終焉日記』、それが単なる日記ではなくて、日記体の文芸作品であることに疑いなく、特に性格化された作者自身が作中に登場して、みずからの主張の正当性を訴えるために有利な証言をする、という意図は看過しがたいのである。それが文書的証拠として正当であるためには遺言者たる父弥五兵衛の人・その生き方に正当性がなければならぬし、証言者たる作中の一茶その人の言動に非があつてはならない。

『父の終焉日記』における父・弥五兵衛は、

ア祖師の忌日なり迎、朝とく嗽ぎなどし給ふに、熱のさへりにもならんと止むれども、一向にとどまり給はず。御
 仏にむかひ、常のごとく看経なし給ふに、御声低う聞ゆる、いかうおとろへ給ふ後姿、心細くおぼゆ。^(注1)

(四月二十八日)

イ今迄神仏ともたのミし医師にかく見はなさるる上へ、秘法仏力を借り、諸天応護のあはれミを乞ふと思へども、
 宗法なりとてゆるさず。

(五月三日)

ウ抑、床つき給ふ日より、朝夕の看経怠る時なくつとめ給ふに、今はおきふしもまゝならず、床にありながら、と
 もしびの影ほのかに、称名となへ給ふ声の常に替りて聞ゆるこそ、何となく心ほそけれ。

(五月十五日)

エ物しづかなるおりからなるに、父うるハしく目をあき給ひ、い、い、いなん。連れて歩め、と云る。いづくへ
 ばし行給ふらん、と問ひければ、いふにやをよぶ、至心々(信樂)經欲生我国と、病なき時の声のごとく、たからく
 となへ給ふ。心にかゝる事ばし「の」給ふ物哉と、心におもへども、うハ言も(たも)にやあるらんと、心すまして居た
 りけりる。(符)注・以下符文か
 いざ行んくとしきりに「の」給ふハ、我も起すまねびをして、いざ行んと「の」給ふ。我もいざ
 くくと、四度、七度、九度、いざくとばかりいへば、又すやくと眠り給ひき。後におもへば、是ぞ物の
 「の」給ひ終、おもへば辞世にてありし也。
 (五月十九日)

と、病臥中も「朝夕の看經怠る時なくつとめ」「いざ行ん」「いふにやおよぶ至心信樂、欲生我国」を最期のことばと
 して、ものいわぬ人となった、というのである。

『仏説無量寿經』(以下略して『大經』という)の法蔵比丘が阿弥陀如来となる前に世自在王如来に誓願した四十八願
 中の第十八願(至心信樂の願)に、

設我得^レ仏、十方衆生、至心信樂、欲^レ生^ニ我國、乃至十念、若不^レ生者、不^レ取^ニ正覺。(注2)
注1) 正法。

第十九願(至心発心の願)に、

設我得^レ仏、十方衆生、発^ニ菩提心、修^ニ諸功德、至心発^レ願、欲^レ生^ニ我國。臨^ニ寿終時、假令不^レ与^ニ大衆^ニ圍繞、
 現^中其人前者、不^レ取^ニ正覺。

と、ある。法蔵の四十八願はことごとく成就して如来となったことは『大経』下巻に釈尊が語るとおりであり、そこに一茶が信仰する親鸞教の根本があることはいうまでもない。

『父の終焉日記』において、父弥五兵衛は仏の教えにたがわず一心に弥陀に帰命する妙好人として登場し、五月三日、一茶は「医師にかく見はなさるゝ上へ、秘法仏力をかり、諸天庇護のあはれミを乞ふと思」うが、父は「宗法なりとてゆるさず」、「只手を空うして最期を待より外ハ」なかつたという。親鸞は『教行信証』の「化身土巻」で『般若三昧経』を引いて、「自歸命仏、歸命法、歸命比丘僧。不得事。余道、不得拜。於天、不得祠。鬼神、不得視。得視。吉良日。」といい、『高僧和讃』の「善導讃」では「仏号ムネト修スレドモ／現世ライノル行者ヲバ／コレモ雑修トナツケテゾ／千中無一トキラハルル」とうたつて、念仏を唱える身になつても、現世の福利を祈り求める者は、自力の行者と同じく、千人中一人の極楽往生もかなわぬと誡めている。親鸞の教えに導かれて一心に弥陀に帰命する弥五兵衛は、五月十九日「いざ行ん」を最期のこととする。それは、かくのごとくに確かな父の信心の当然の帰結というべきであろう。一茶の「いづくへばし行給ふらん」の問に対し父は「至心信樂欲生我國」と答える。『大経』の第十八願において法蔵は、十方世界の衆生が至心に信樂して浄土を願ひ、一声でも念仏するほどの者には必ずそれをたせませす、と世自在王如来に誓願、それが成就しているのだから父の浄土往生は疑いなく、さらに第十九願の来迎もまた疑いないことなのだ。

念仏者が命終る時に仏の来迎があることは、浄土經典に必ず説かれてあることだが、一茶が暗誦していたと思われる『仏説阿弥陀経』にも、

聞レ説ニ阿弥陀仏ニ、執持ニスルコト 名号ニ、若一日、若二日、若三日、若五日、若六日、若七日、一心不レ乱、其人臨ニ命終時ニ、阿弥陀仏、与ニ諸聖衆ニ、現在ニ其前ニ、是人終時、心不ニ顛倒ニ、即得レ往生ニ阿弥陀仏極樂国土ニ。
(注3)

と、ある。

三

『父の終焉日記』における父弥五兵衛は、極楽国往生まぢがいなき人物として構想されていることは前項までに述べたとおりである。その「極楽国」について『大経』では、釈尊が阿難尊者に對して、

其国土、七宝諸樹、周滿世界。金樹、銀樹、瑠璃樹、珊瑚樹、碼碯樹、磈磈樹。或有二宝三宝乃至七宝轉共合成。

清風時発、出五音声、微妙、宮商、自然、相和。

周二匝、条間、垂宝瓔珞、百千万、色種々異変、無量光燄、照耀無極、珍妙宝網羅覆其上。一切莊嚴隨應而現。微風徐動、吹諸技葉、演無量妙法音声、其声流布、徧諸仏国。

亦有自然万種伎樂、又其樂声無非、法音清揚哀亮、微妙和雅。十方世界音声之中、最為第一、

内外左右有諸浴池——中略——八功德水、湛然、盈滿、清淨香潔、味如甘露。——中略——波揚無量、自然妙声隨其所應、莫不聞者。或聞仏声、或聞法声、或聞僧声、或寂靜声……

などとあり、『阿弥陀経』にも、釈尊が舍利弗に向つて、

極楽国土、七重欄網、七重羅網、七重行樹。皆是四宝。周匝、圍繞。是故彼国名曰極楽。

極楽国土、有七宝池、八功德水充滿、其中池底純以金沙布地。

彼国、常有種種奇妙雜色之鳥。白鶴、孔雀、鸚鵡、舍利、迦陵頻伽、告命之鳥。是諸衆鳥、晝夜六時出和雅音。其音演暢五根、五力、七菩提分、八聖道分、如是等法。其土衆生、聞是音已、皆悉念仏、念法、念僧。などと、そのさまが説いてある。

『寛政三年紀行』の四月十五日（実は十四日）、妙義神社に参詣して、

神殿ハ杉にかくれて、画梁の粧ひかうぐしく、玉垣ハ旭のかげに朱をまして涼しく、神樂の声ハ松風に和して人を導き、

啾々たる鳥ハ、仏土妙音の響かとも聞へて、さながら別世界に入かと思ふ。

と記し、五月十八日善光寺に参つて、

堂額ことし修造有て、仏も寂光の月新にかゝやきを添へ、蓮ハ花の盛を待て、九品の露〔を〕あらそふ。妙典読誦の声ハ普く「衆」生の心を和らげ、

と、記してある。

妙義の神域に足を踏み入れ、その社殿とあたりの雰囲気に触れ、『阿弥陀経』でいう極楽国土「七重欄楯、七重羅網、七重行樹。皆是四宝周匝、围绕。」『大経』の「微風徐動、吹諸枝葉、演無量妙法音声、其声流布、徧諸仏国。」を思い起し、『海道記』の「画梁のよそほひ」に思い合わせたものとみたい。

また、「啗々たる鳥ハ、仏土妙高の響かとも聞へて……」は『阿弥陀経』にいう「白鵠」「孔雀」などの「奇妙雑色之鳥」が、「昼夜六時出和雅音。」をふまえているものであるう、ということはずでに諸家も指摘されているとおりである。

さらに、善光寺の条の「仏も寂光の新月にかがやきを添へ、蓮ハ盛を待て……」も、『海道記』の「寂光の月老いたりといへども」「覚路の蓮は、かならず九品の露にひらき」によるとだけ見るのは、遠藤誠治氏以来の定説であり、『寛政三年紀行』の全編にわたって『海道記』の影響を見ることができのだが、極楽国に「八功德水充滿」の「七宝地」があり「自然妙声随其所応、莫不聞者。或聞仏声……」という『大経』の経文も無視できない。善光寺の寂かな境内・修復成った伽藍・本堂の荘厳に接して、浄土經典に説かれた極楽国、その経文を思い合わせたと考えたいのである。『父の終焉日記』における人物構想の背後には、『大経』の教えが確かにあって、成稿の時期をほぼ一にする『寛政三年紀行』にもその影があつて不思議はなからう。浄土三部経、特に『大経』は浄土真宗の根本聖典であり、この宗派における説教の中心は『大経』の第十八願の布教にあるのは今日においても変わりなく、この時代、それと解説・図説した布教書の刊行も少なくないことは周知のごとくである。

四

「設我得^レ仏、十方衆生、至心信樂、欲^レ生^ニ我國^ニ、乃至十念、若不^レ生者、不^レ取^レ正覺。唯除^ニ五逆^ト、誹謗^ニ正法^ト」といふ法蔵の第十八願の成就によつて、『父の終焉日記』の父は往生をとげた。もちろん「發^ニ菩提心^ト、修^ニ諸功德^ト、至心發^レ願、欲^レ生^ニ我國^ニ。臨^ニ壽終時^ニ、假令不^レ下^レ与^ニ大衆^ト圍繞、現^ニ其人前^ト者。不^レ取^ニ正覺^ト。」(『大經』第十九願)によつて、父は如来(無量壽仏)の来迎を得て往生したのでなければならない。

『大經』下卷には、

臨^ニ壽終時^ニ、無量壽仏、与^ニ諸大衆^ト、現^ニ其人前^ト。即隨^ニ彼仏^ト、往生^ニ其國^ニ。便於七宝華中、自然化生、住^ニ不退轉^ト。其人臨^レ終、無量壽仏化現^ニ其身^ト。光明相好、具如^ニ真仏^ト。

と釈尊は阿難に如来の来迎を説いている。

文化十五年(文政元年)、一茶は『おらが春』の起稿にあたって、その巻頭文として用意したのは、『沙石集』巻九下の「迎講事」であった。慶長古活字十二行本によれば、

丹後国普甲寺ト云所上人アリケリ。極楽ノ往生ヲ願テ、万事ヲ捨テ臨終正念ノ事ヲ思ヒ、聖衆来迎ノ儀ヲ願ケ

ル。セメテモ志ヲ休ントテ、世間ノ人ハ正月ノ初ハ思願フ事、イワヒ事ニスル習ナレバ、我モイワヒ事セント思テ、大晦日ノ夜、一人ツカフ小法師ニ状ヲ書テトラセケリ。此状ヲモテ、明朝元日ニ門ヲ叩テ、物申サントイヘ。キヅクヨリト問バ、極楽ヨリ阿弥陀仏ノ御使ナリ。御文トテ、此状ヲ我ニ与ヨト云テ、外ヘヤリヌ。上人ノ教ノ如ニ云テ、門ヲ叩キテ、約束ノ如ク問答ス。此状ヲ、イソギアハテサワギ、ハダシニテ出デ、請取、頂載シテヨミケリ。娑婆世界ハ、衆苦充滿ノ国也。早厭離シテ、念仏修善勤行シテ我国ニ来ルベシ。我聖衆ト共〔ニ〕来迎スベシトヨミツ、サメホロト泣クスル事、毎年ニ不怠。其国ノ国司下リテ、人々国ノ事物語ケルツイデニ、斯ル上人アルヨシ申ケルヲ国司聞テ、随喜シツ、上人〔ニ〕対面シテ、何事ニテモ仰ヲ承テ結縁可申ト、被申ケレドモ、「遁世ノ身ニテ待リ。別ノ所望ナシト、返事セラレケレドモ、事コソカワレドモ、人ノ身ニハ必要アル事ナリト、シキテ被申ケレバ、迎講ト名テ、聖衆ノ来迎ノヨソヲキシテ、心ヲモナグサメ、臨終ノナラシニモセバヤト思事侍リト被申ケレバ、仏菩薩〔ノ〕装束等、上人〔ノ〕所望ニ随テ調ジテゾ被送ケル。サテ聖衆来迎ノ儀式ノ臨終ノ作法ナムド、年久ナラシテ、思ノ如ク、臨終ノ時モ来迎ノ儀ニテ、終リ目出カリケリ。コレ迎講ノ始ト云ヘリ。(以下略)^(注5)

と、ある。

父弥五兵衛の最期をみとり、『父の終焉日記』を書き終えた一茶が、周到的な用意をもって起稿した『おらが春』の巻頭に、『沙石集』のこの説話を準備、

おのれかしらには霜をいたゞき、額にはしはく波の寄せ来る齡にて、弥陀たのむすべもしらで、うか／＼月日を費やすうちに、此世の縁尽せぬにや、五十余年我身につもる老を忘れて、一期の月も西山にかたぶく命ながらへ

て、露の玉の緒の今迄切ざるもふしぎ。又ことし鶴亀にたぐへて祝尽し、門松もかざる。(真蹟)^(注6)

と、結んだ(この結びが定稿のごとく推敲されたことについて、詳しくは別稿を成しているから今は省く)。

『おらが春』の主題として作者が意図したものは、その内容から継子としての自己の境涯をふりかえりつつ、育ちゆく長女さとへの愛と期待を述べることにあったのだが、その巻頭の章段で何をあつかうかには腐心したらしく、一度清書の後に改稿・差替えをするなどそれを推測するに難くない。^(注7)

『おらが春』は、一年の句文集の体をとって、それは頭初からの構想であった。したがって、巻頭に新年の説話を用意するのは当然のことではあるが、そこに『沙石集』のとくに「迎講事」を置くには、それなりの意味があったと見なければならぬ。

『父の終焉日記』における父の往生、『寛政三年紀行』に散見される浄土經典が描く極楽のさまに影響されたと見られる部分、そして、「迎講事」の「極楽ノ往生ヲ願テ、万事ヲ捨テ、臨終正念ノ事ヲ思ヒ、聖衆来迎ノ儀ヲ願ケル」「念仏修善勤行シテ我国ニ来ルベシ。我聖衆ト共「ニ」来迎スベシ」とを並べてみれば、『父の終焉日記』以降の念佛一茶の生の軌跡を見ることができよう。

『七番日記』文化十五年(文政元年)十二月の条には、

あちへむきこちへねぢれて山道の曲りなりなるとしの暮哉

翌月の『八番日記』文政二年正月の条には、

かりそめの話も人のゑりもとのうき世の中も住みなるゝかな

隣りながら水となり行く淡雪のあは／＼しさの世をたのむかな

行く水にさらば／＼と淡雪のあかれぬまいに流れけるかな

の、俳諧歌が記してある。弥陀の本願力を知った者の心境とみてよからう。

『おらが春』巻頭の章段において、一茶はまず、『沙石集』の「迎講事」にある説話の要約を置き、原本の一・二丁の差替え以前にあったかと推定する「おのれかしらには」の真蹟の文でこれを結び、年末には蓮如上人の『御文章』になぞらえた第二十一話の草稿を成したであろう。それが一度清書のあと、「おのれかしらには」の真蹟のもとになったと推定される結びは、定稿のごとくに改稿され、さらにその部分の差し替えがなされたものと思われる。

「おのれかしらには」以下の文意は、「私は頭に白いものをいただき、額にはしわの寄るこの年になっても、真に弥陀を頼むすべも知らずにいる。はずかしいことだ。それなのにこうして元気でいられるのは不思議というほかない」ということになり、普甲寺の上人のその呪いめいた一人狂言（『沙石集』は「心ヲモナグサメ、臨終ノナラシニモセバヤ」とある）に対してはそれを讃え、わが身をかえりみるというものだ。しかるに、定稿の結びは、「仏門においてはいはひの骨頂なるべけれ」と、それを一度肯定したうえで、

それとはいさゝか替りて、おのれらへ、俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴亀にたとへての祝尽しも、厄払いの口上めきて、そらぐしく思ふからに、から風の吹けばとぶ屑屋へ、くづ屋のあるべきやうに、門松立てず煤はかず、雪の山路の曲り形りに、ことしの春もあなた任せになんむかへける。(注8)

と結んである。第二十一話との呼応を考へての改稿であることはいままでもない。自分は俗塵に埋れて生きる境涯ではあるが、「後生の一大事へ其身を如来の御前に投げ出して、地獄なりとも極楽なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばされくださいませ」（第二十一話）と決定しているから、仏門の「迎講」にあたる「鶴亀にたぐへての祝尽し」でさえ「そらぞらしく思」うというのである。一茶なりの「自然法爾」といふべきであらう。

『おらが春』第一話の差替えは、第二十一話との呼応を考えてのことであつたが、それによつて、前年末の「あちへむきこちへねぢれて山道の曲りなりなるとしの暮」の俳諧歌の思想にも合致する。そればかりか、もし改稿なくんば『父の終焉日記』において、父の言として記した「秘法仏力を借り」て「諸天応護のあはれミを乞」うことは「宗法」に反する、という確かな考え方にももつとることにもなるだろう。

『父の終焉日記』における専修念仏、排呪の思想は、『おらが春』において、「さて後生の一大事ハ、其身を如来の御前に投出して、地獄なりとも極楽なりとも、あなた様の御はからひ次第あそばさりくださりませと、御頼ミ申ばかり也。……／＼ともかくもあなた任せのとしの暮」(第二十一話)、「おのれらハ、俗塵に埋れて世渡る境界ながら、鶴亀にたぐへての祝尽しも、厄払いの口上めきてそらぐしく思ふ」(第一話)という順に記されたのである。

五

『おらが春』第三話は、「正月元日の夜の丑刻より始まりて、打つどき八日目／＼に天に音楽あるといふ」風聞に、「三月十九日夕過より、誰かれ我菴につどひ」それを待たがついに聞くことができなかつた、というものである。『八番日記』にはこの風聞についての記載はなく、三月十九日の条は「晴」とのみ記してある。

作中には「いにしへ甘露を降らせ、乙女の天下りて舞しためしなきにしもあらず。今此天下泰平に感じて、天上の人も腹鼓うち、俳優してたのしむならめ。それを聞得ざるハ、其身の罪の程ニよるべし」とある。

「茶は「天に音楽あるといふ事」に心を寄せ、「それを聞得ざる、其身の罪の程ニよるべし。」と考えたことだけが確かだ」「正月元日の夜の丑の刻より」という風聞も、「三月十九日」のことも虚構であろうと思われる。「天に音楽あ

るといふ事」に対する興味の背後に『大経』の、

清風時発、出ニ五音声一。微妙 宮商。自然相和（上巻）

微風徐動、吹ニ諸枝葉一、演出ニ無量妙法音声一。其声流布、徧ニ諸仏国一。其聞レ音者得ニ深法忍一、往ニ不退転一。（上巻）

亦有ニ自然万種伎楽一。又其楽声、無非ニ法音一清揚哀亮、微妙和雅。十方世界音声之中、最為ニ第一一。（上巻）

等々と、釈尊が阿難に語った極楽国の世界があつたと思われる。

『おらが春』第十二話は、さと女への恩愛の情を述べる。『おらが春』起稿時のもう一つのテーマである。さと女は、同年（文政二年）六月二十一日疱瘡のために没するのだが、その生前のさまを、

此おさな、仏の守りし給ひけん、迨夜の夕暮に持仏堂に蠟燭てらして^(鈴) 鑰打ちならせば、どこに居てもいそがハしく
 這よりて、さわらびのちいさき手を合せて、「なんむく」と唱ふ声、しほらしく、ゆかしく、なつかしく、殊勝
 也。それニつけても、おのれかしらにはいくらかの霜をいただき、額にはしハく^(も) 波の寄せ来る齡にて、弥陀たの
 むすべもしらでうかく月日費さすこそ……

と、記してわが身にひき比べている。「さわらびのちいさき手を合せて、なんむく」と唱うるさと女のさまは、『父の終焉日記』における弥五兵衛の「床つき給ふ日より、朝夕の看経怠る時なくつとめ給ふ」に重なり、『大経』にお

ける法蔵の四十八の誓願に帰結する。作者にとって愛児さと女の極楽往生もまた疑いないことであつたのである。

注

- 1 以下『父の終焉日記』本文は古典俳文学大系本による。
- 2・3 以下『仏説無量寿経』の経本は大正新修大藏経本(卷十二)により、『梵文和訳／無量寿経・阿弥陀経』(藤田宏達・法蔵館版)・『浄土三部経概説』(坪井俊映・隆文館版)・『原文対照／和訳浄土三部経』(伊藤精次・日本仏教研究会版)を参考した。なお使用漢字は原則として現行漢字に改めた。
- 4 以下『寛政三年紀行』の本文は拙著『寛政三年紀行』(高文堂新書)による。
- 5 『沙石集』の本文は古典文学大系本による。
- 6 「おのれかしらには」の真蹟は『解註一茶文集』(伊藤正雄・三省堂版)による。
- 7 詳しくは拙稿「おらが春の起稿時」(『解釈』昭46・9所収、のち日本文学研究資料叢書『蕪村・一茶』に再録)、「おらが春の成立をめぐって」(『関東短大紀要』第18集所収)などを参照されたい。
- 8 以下『おらが春』の本文は拙著『校本おらが春』(成文堂版)による。

付記

別稿「『父の終焉日記』の人物構想」(『解釈』昭52・11所収)を併せてご覧いただければ幸甚である。